様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２４０８

研究課題名（和文）大西洋往還知識人ネットワークの形成とスペイン語圏文化地図の変化についての研究

研究課題名（英文）Studies on the formation of tlansatlantic intellectual network and the change of culture map in Hispanic regions

研究代表者
柳原　孝敦（Yanagihara, Takaatsu）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：２０２８７８４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、作家や知識人の移動（亡命など）が、その移動した先の文化に及ぼす影響を記述・考察するものであり、その結果、「ラテンアメリカ文学」などの概念を捉え直すこと、そしてやがては、近年語られることの多い「世界文学」との関連を探ることを目的としている。本研究の期間、私は5本の雑誌掲載論文、2件の口頭発表（講演）、一冊の単著を発表し、その成果を世に問うた。それぞれ、モデルニスモの時代、アルフォンソ・レイエスとアレホ・カルペンティエールの事例、ホルヘ・ルイス・ボルヘス、スペイン内戦などを扱いながら、ラテンアメリカの意識の形成と解体、その後の「世界文学」の概念への展開の問題を論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ラテンアメリカの概念を一種の拡大ナショナリズムとして捉え、かつ、それが大西洋の向こう側の存在を必要としていたという私の主張は、それ自体、他には見られない主張であるが、さらにそれを「世界文学」の概念へのステップとしてみなす見通しを得、それを独自の文学史記述に活かしている最中である。

研究成果の概要（英文）：　This research is to describe how writers and intellectuals made their tlansatalantic travels (as exile, for instance) and contributed to the change of culture in regions they moved in. During this period, I published 5 papers and one book, and made two conference on the theme. These publications dealt with, respectively, El Modernismo, Alfonso Reyes, Alejo Carpentier, Jorge Luis Borges, Spanish Civil War, Latin Americans in Paris and cultures in Mexico City, in which I studied about formation of Latin Americanism and its aporia,and its development into the idea of “World literature”. My purpose is to rethink, in the near future, the history of Latin American literature in order to re-capture it in relation with “World literature”.

研究分野：外国文学

キーワード：ラテンアメリカ　スペイン　拡大ナショナリズム　世界文学　トランスアトランティック　スペイン内戦　第二次世界大戦　ラテンアメリカ主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

本研究の出発点は、以前の著作『ラテンアメリカ主義のレトリック』(エディマン／新宿書房、2007）にあった。文化的統一体としてのラテンアメリカの概念（拡大ナショナリズム）が、そもそもヨーロッパとラテンアメリカとの間を往還した知識人たちのヴィジョンに支えられているというのがそこで得られた観測であった。フランスなどで当時流行の人種主義を前提にしたラテン／ゲルマン、ラテン／アングロサクソンといった対立軸を基に「ラテンアメリカ」の語が、フランス在住のラテンアメリカ知識人の手によって生み出され、それがシェイクスピア的な比喩とともにアメリカ合衆国の帝国主義的拡張に対抗する言説としてラテンアメリカ各国内で広まっていくという構図を描いたのであるから、そこには常に大西洋を超えた人的交流があるという前提なのだ。

２．研究の目的

特にスペイン内戦やヨーロッパの大戦を契機としてヨーロッパからアメリカ（南北両アメリカ、カリブ地域）に亡命・移住・帰還した作家や知識人たちが形成したネットワークを描き出し、そこから彼らの業績を検証し直す。そのことにより、従来の作品観、作家観、歴史記述を見直すことが目的である。

大西洋往還の視点は文化史、文学史を含む歴史記述の、国民国家中心の視点を検証するものになる。「スペイン文学史・文化史」「メキシコ文学史・文化史」等々や「ラテンアメリカ文学史・文化史」の記述の取りこぼしてきた要素をすくいあげ、文学と文化の歴史を書き換えることを目指す。

３．研究の方法

アレホ・カルペンティエール、アルフォンソ・レイェスら、従来から私が研究対象として重点的に読んできた作家の周辺に位置する作家、知識人たちに関係するアーカイヴの調査や、彼らについての個々の作品論、作家論の刷新などを目指した論文発表などを中心とする。また、広く「文化地図」の変化を目的とするので、文学に限らず、映画、美術、音楽、ジャーナリズムなどの諸分野も射程に入れる。

４．研究成果

〔図書〕に挙げた立石博高編著『概説　スペイン文化史―18 世紀から現代まで』（ミネルヴァ書房、2015 年）の執筆は本研究の助成を受ける前になされたものなので、「成果」として報告すべきか疑問ではあるが、本研究が大西洋の両岸の国々を対象とするものである以上、その出発点としてのスペインの文化史について考察することが有意義であったことは間違いない。本研究の出発点に置くものとしてはふさわしい。筆者は文学、映画、闘牛の 3 つの章の執筆を担当している。

また、同じく〔図書〕に挙げた翻訳アルフォンソ・レイェス著『アナワクの眺め』（ヌエボレオン州立大学、2016 年）は以前（2008 年）同大学出版部から刊行した二言語版の再版であるが、私の研究の出発点はあくまでもアルフォンソ・レイェスであるため、この翻訳を見直し、改訳したことは自身の研究に大いに役立った。

同様に〔図書〕に挙げた翻訳ロベルト・ボラーニョ著『第三帝国』（白水社、2016 年）は、その著者ボラーニョがチリ生まれでメキシコで青春時代を過ごし、後にスペインに移民し、その地で客死した作家であり、作品内容としてもグローバル化の時代の人の移動を前提としたものを主に書いている作家なだけに、今後の私の研究対象の中心のひとりをなすことになると思われる。現実に、私は本研究最終年度には作家が住んだバルセローナおよびその近郊の都市を訪れ、ボラーニョの足跡をたどり、関連の資料を収集してきた。これらについては今後、成果が発表されものと確信している。

下記発表論文等の数には入れていないが、2016 年にはチリのドキュメンタリー映画作家パトリシオ・グスマンの作品『チリの闘い』全三部作（1973-1979）がはじめて一般公開された。その際のパンフレットに「空爆の記憶」という一文を寄せた（『チリの闘い／劇場用パンフレット』アイ・ヴィー・シー、2016、94-99 ページ）。1973 年のチリのクーデタを扱ったこの映画と、その製作の顛末は、当のクーデタがスペイン内戦による移民と第二次世界大戦によるドイツ人移民の問題に深く関わるものであることを確認する結果となった。後に Isabel Allende, *Lárgo pétalo del mar* (Vintage Español, 2019)といった小説にもこのことが反映されている（これは大学の授業で読んだ）ことを知るにつけ、ここからグローバル化の問題、すなわち世界文学概念の展開の問題といった今後のテーマに関係づけられそうだとの手応えを得た。

発表した雑誌論文は、以下のとおり。

1) 柳原孝敦「突き出した指はどこから来て、どこへ行くのか――スペイン内戦のポスターとソヴィエト、そしてメキシコ」『れにくさ』6 号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部　現代文芸論研究室、2016 年、91-99 ページ。

これは研究ノートとして発表した。アメリカ大陸への大量の移住を生み出すスペイン内戦時、ポスター芸術による両陣営のプロパガンダが盛んであった。それらの代表的ポスター芸術の傾向を分析しつつ、そこで活躍した画家たちの少なからぬ数がメキシコへ亡命し、おりしもその地で盛り上がりを見せていた壁画運動にかかわったことなどを指摘。今後の研究の課題とした。

2) 柳原孝敦訳、ルベン・ダリーオ「われわれの目的」、『俗なる詠唱』「緒言」、「来年はずっと青」、『れにくさ』第 7 号、東京大学現代文芸論研究室、2017 年 3 月、130-135 ページ。（翻訳注釈）

これは出発点で挙げた前著の中心をなしていた詩人、ルベン・ダリーオの没後百年を記念して紀要『れにくさ』で組んだ小特集の一環として翻訳と注釈を行ったもの。

3) 柳原孝敦「劇場と祭のトポス――カルペンティエールの場合」『れにくさ』第８号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部　現代文芸論研究室、2018 年、240-255 ページ。

アレホ・カルペンティエールの 1975 年の小説『方法再説』の構造分析を試みた論文だが、その小説世界構築の中心となる「こちら」と「あちら」の場所の意識は自身、ヨーロッパとカリブ世界を行き来した存在でありながら、大西洋の両端をあえて区分することによって成立する「ラテンアメリカ主義」の一種歪まざるを得ない認識が影を落としている。

4) 柳原孝敦「コスモポリタンな欲望　ブエノスアイレス–パリ–ブエノスアイレス」『れにくさ』第９号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部　現代文芸論研究室、2019 年、145-156 ページ。

上記 2)で翻訳、注釈したニカラグアの詩人ルベン・ダリーオの態度を「コスモポリタンな欲望とする Mariano Siskind (*Cosmopolitan Desire: Global Modernity and World Literature in Latin America*, Northwestern UP, 2014)の議論を受け、パリのラテンアメリカ人たちが深く関わることになった雑誌の問題に触れた。これは〔学会発表〕「コスモポリタンな欲望―ブエノスアイレス–パリ–ブエノスアイレス」（第 9 回世界文学・語圏横断ネットワーク研究集会、2018 年 9 月 21 日　於・立命館大学）を文章化したものである。これはまた同じく〔学会発表〕の「世界文学の時代―ラテンアメリカ文学のひとつの首都パリ」日本フランス語教育学会 2016 年度秋季大会、2016 年 10 月 15 日（於：金沢大学）とも深く関係する内容である。本論では、メキシコの作家アルフォンソ・レイェスとフランス作家ヴァレラー・ラルボーの親密な仲について言及し、彼らの往復書簡を読み解き、ダリーオの時代からレイェスの時代へと続く 30 年ばかりの活動が、後のラテンアメリカ文学の「ブーム」を用意する素地になることを検証した。つまり、ダリーオの時代からレイェスの時代にいたる 30 年ばかり、ラテンアメリカを代表する詩人・作家たちが、パリにおいてラテンアメリカ文学を実現させる（フランス語でその内容を知らしめる）ことを望んできたわけだが、その望み・欲望はレイェスに至って叶えられそうで叶えられない、極めて副次的なしかたで叶えられてきたということだ。それがパリでフランス語でラテンアメリカ文学が知られるに至ったと言うには、ボルヘス（レイェスの 10 歳年少にして、彼を師と仰いだ人物）を待たなければならなかった。そこにも雑誌は深く関わっているし、それに伴う人の移動も重要な役割を果たしている。

5) 柳原孝敦「翻訳と書き換え―「死とコンパス序説」」『れにくさ』第 10-1 号（2020.03）589-596 ページ。（研究ノート）

これはダリーオ、レイェスと続くコスモポリタンな欲望が、しかし、現実に叶えられるのはレイェスを師と仰いだホルヘ・ルイス・ボルヘスに至ってであるという前述論文の結論部を受け、では、その欲望を叶えることになったボルヘスの欲望の形はどんなものであったか、との問いかけを扱ったもの。研究ノートの体裁を取るのは、これが作品分析というよりはある作品についての前提を巡る考察なので、論文と認識されないかもしれないとの恐れからこのカテゴリーにした。ただし、以前の論文とのそうした連続性を持っているので、私の研究の中では一貫しているものである。なお、この研究ノートは〔学会発表〕Takaatsu YANAGIHARA, “Borges and his Translation Theory (Borges y su teoría de la traducción)”, Japan-Latin America Academic Conference 2018 in Nikko, workshop Session 2 Litrature 1 Borges and Translation 2018 年 9 月 26 日（於:日光ホテル千姫物語）を日本語で文章化したものである。

学会発表については、そのそれぞれが上記の論文に結実しているため、その欄で記したとおりだが、最後に記した “Borges and his Translation” について補足説明する。

この発表した Japan-Latin America Academic Conference というのは、東京大学とチリ大学、チリ・カトリカ大学、メキシコ国立自治大学などが共同で開催したこの学術会議である。ここで私は当該セッションともうひとつの文学関係のセッションの司会･コーディネーターも務めた。

また、この会議は基本的には英語でなされたのだが、私の発表した “Borges and Translation” のセッションのみは参加者、聴衆らの了解のもと、スペイン語でなされた。

〔図書〕において最も重要な成果は、柳原孝敦『テクストとしての都市　メキシコＤＦ』（東京外国語大学出版会、2019 年、272 ページ）である。学術的というよりはいささか一般向けではあるものの、特に後半は本研究のために行った研究旅行で得た資料（およびみずから撮影した写真）を利用しており、本研究の成果のひとつであることは間違いない。メキシコ市の数カ所の地点についての歴史的・文化的説明である本書には、メキシコの文化が環大西洋往還の知識人たちの仕事および彼らのネットワークによって作られたものであることを充分に示し得たものと自負する。トロツキーの亡命と暗殺について、スペイン出身の映画監督ルイス・ブニュエルがメキシコ市の変化を的確かつ興味深く捉え得た貴重な表現者であったこと、ソ連の映画監督セルゲイ・エイゼンシュテインが 1930 年前後のメキシコを題材としていること、後にスペインに客死するチリ生まれの作家ロベルト・ボラーニョがメキシコ市の空気を実にうまく描い

たこと、そして彼の記述が日本の作家・大江健三郎の小説とも呼応することなどを論じ、大西洋を超えた人の交流がメキシコの文化を豊かにしてきたことを強調した。

そのほかの〔図書〕の成果としてはいずれも翻訳が挙げられる。

エドゥアルド・メンドサ『グルブ消息不明』（東宣出版、2015 年）はバルセローナを扱った新聞連載の小説。メンドサ自身、ニューヨーク在住経験のある作家で本研究の立場からも興味深い。

セサル・アイラ『文学会議』（新潮社、2015 年）はアルゼンチンの作家の中篇小説 2 編を収めた翻訳だが、彼の作品がかつて「ブーム」を巻き起こしたラテンアメリカ文学の作風から、近年のグローバル化の時代に対応する作風への変化の時代に位置づけられるものであること、つまり、本研究に言う「文化地図の変化」を画するものであることを「訳者あとがき」に記した。

フアン・ガブリエル・バスケス『物が落ちる音』（松籟社、2016 年）の作者バスケスはパリ大学でラテンアメリカ文学についての博士号を取得し、長くバルセローナに在住したコロンビアの作家で、コロンビアの歴史を外部世界との関係の中に捉え返す視点が優れている。本作品は麻薬王の暗躍で知られたコロンビアの麻薬事情をアメリカ合衆国が組織した平和部隊との関連で捉え直して興味深い作品である。

以上の既に出版された成果に加えて、私は現在、これまでの研究の成果を基に、独自の視点からラテンアメリカ文学の歴史を切り取る書物を準備中であり、その一部は版元となる予定の書肆侃侃房の主宰する web 上の原稿掲載サイト note において連載中である。（「シリーズ世界文学の体温／ラテンアメリカ編　亜熱帯から来た男」https://note. com/kankanbou_e/m/ma35b1db852b1 ）　これらも、連載を完結し、出版された暁には、本研究の成果とすることができるであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 柳原孝敦	４．巻 10-1
２．論文標題 翻訳と書き換え -- 「死とコンパス」序説	５．発行年 2020年
３．雑誌名 れにくさ	６．最初と最後の頁 589-596
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柳原孝敦	４．巻 9
２．論文標題 コスモポリタンな欲望――ブエノスアイレス－パリ－ブエノスアイレス	５．発行年 2019年
３．雑誌名 れにくさ	６．最初と最後の頁 145-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 柳原孝敦	４．巻 8
２．論文標題 劇場と祭のトポス――カルペンティエールの場合	５．発行年 2018年
３．雑誌名 れにくさ	６．最初と最後の頁 240-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 ルベン・ダリーオ、柳原孝敦訳	４．巻 7
２．論文標題 「われわれの目的」「『俗なる詠唱』緒言」「来年はずっと青」	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『れにくさ』	６．最初と最後の頁 130- 135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 柳原孝敦	4．巻 16
2．論文標題 突き出した指はどこから来て、どこへ行くのか　スペイン内戦のポスターとソヴィエト、そしてメキシコ	5．発行年 2016年
3．雑誌名 れにくさ	6．最初と最後の頁 91-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Takaatsu Yanagihara
2．発表標題 Borges and his Translation Theory (Borges y su teoria de la traduccion)
3．学会等名 Japan-Latin America Academic Conference 2018 in Nikko（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 柳原孝敦
2．発表標題 コスモポリタンな欲望――ブエノスアイレス－パリ－ブエノスアレス
3．学会等名 第九回世界文学・語圏横断ネットワーク研究集会
4．発表年 2018年

1．発表者名 柳原孝敦
2．発表標題 世界文学の時代――ラテンアメリカ文学のひとつの首都パリ
3．学会等名 日本フランス語教育学会（招待講演）
4．発表年 2016年

〔図書〕　計7件

１．著者名 柳原孝敦	４．発行年 2019年
２．出版社 東京外国語大学出版会	５．総ページ数 272
３．書名 テクストとしての都市　メキシコＤＦ	

１．著者名 アルフォンソ・レイェス、柳原孝敦訳	４．発行年 2016年
２．出版社 ヌエボレオン州立大学	５．総ページ数 78
３．書名 アナワクの眺め／Vision de Anahuac （対訳版）	

１．著者名 ロベルト・ボラーニョ、柳原孝敦訳	４．発行年 2016年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 404
３．書名 第三帝国	

１．著者名 立石博高編著（うち、柳原は3章を執筆担当）	４．発行年 2015年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 366
３．書名 概説　スペイン文化史　18世紀から現代まで	

１．著者名 エドゥアルド・メンドサ、柳原孝敦翻訳	４．発行年 2015年
２．出版社 東宣出版	５．総ページ数 232
３．書名 グルブ消息不明	

１．著者名 セサル・アイラ、柳原孝敦訳	４．発行年 2015年
２．出版社 新潮社	５．総ページ数 192
３．書名 文学会議	

１．著者名 フアン・ガブリエル・バスケス、柳原孝敦訳	４．発行年 2016年
２．出版社 松籟社	５．総ページ数 314
３．書名 物が落ちる音	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考